説教余滴、2018 年 9 月 22 日『カラスの早起き、スズメの寝坊』

少年の頃、ハシブトカラスとハシボソカラス、カワガラスがある、と聞き鳥類に興味を持ちました。同じカラスでもくちばしの太さに違いがある、ということでした。違いが分かる、見つけるってすごいなあ、と感心しましたが、間もなく関心は薄れました。子供心の興味は、すぐ他のことに移ってしまうものです。魚類の図鑑にも関心を寄せました。
天体図、星座表、鉱物、地質学、細菌類などはだめでした。図書館で目に入っても手が出ませんでした。気が合わない、といえば簡単ですが、喧嘩別れしたはずもないので、残念な感じは残りました。知能の程度が低くて、手に合わなかったのでしょう。

札幌生活の間では、植物への関心が高まりました。大阪時代から続いていたのですが、どのように生かすか、ということが課題でした。その植物の由来を知り、その生育環境に近くすることが大事、と感じてきました。然し、それですべて解決するほど簡単ではありません。営養給肥、土壌改善が課題となります。難しいことです。
中学生時代の進路適性検査では、農事・気象が、幾つかの一つとして示されていました。
どうしてそちら方面を選ばなかったのでしょうか。自分でも分かりません。確かに「晴耕雨読」と言う言葉への憧れはありました。然し、あの骨まで痛むような苦しい労働は、自分には出来ない、と諦めていたのではないでしょうか。

神奈川県とか、三浦半島は、自然観察、記録がとても盛んだと感じています。コジュケイやクマゼミの生態調査がなされていることに驚きました。表記は、柴田とよ子さんのお連れ合いが出版された著書の題名です。大変面白い御本で、驚きました。知らないことが一杯。私の知るところはほんの少し。もっと知りたいと感じています。知的興味を掻き立ててくれました。